

平成28年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第3年次）（概要）

1 研究開発課題名	ソリューションフォーカスの視点に立つスーパー・プロフェッショナル・ケアワーカーの育成						
2 研究の概要	<p>本研究では、基礎的・基本的な技術・技能の習得に加え、高度かつ応用的な知識や技術に触れさせ刺激を与えていくことで、これまで以上に福祉や介護への強い情熱と高い誇りを有し、同時に自らの知識・技術・技能に自信を持って地域福祉に貢献できるケアワーカーを育成することを目的としている。ソリューションフォーカスとは、「課題解決志向」ともいわれ、原因分析にこだわりすぎず、ニーズに対して肯定的な未来イメージを持ち、実行可能な具体的解決行動を先行させる思考法ないしはコミュニケーション手法のことである。</p> <p>ソリューションフォーカスの視点に立ち、介護サービス利用者（以下、利用者という）の課題を的確に判断しながら、利用者の生活をより良くする「利用者本位の介護」を生徒が主体的に考え、困難な課題にも協働して解決できる能力を養うために「気づく⇒考える⇒解決策⇒実施」させる取組を行ってきた。</p>						
3 平成28年度実施規模	<p>総合福祉科で実施する。研究実施の中で、授業におけるICTの活用については電気情報システム科と連携して実施している。また、行事の中のウエルフェア・コレクション（障害者ファッションショー）は、電気情報システム科、環境建設工学科、総合デザイン科との連携により実施している。</p>						
4 研究内容	<p>○研究計画（指定期間満了まで。5年指定校は5年次まで記載。）</p> <table border="1" data-bbox="183 1332 1396 1758"> <tr> <td data-bbox="183 1332 359 1456">第1年次</td> <td data-bbox="359 1332 1396 1456"> <p>ケアワーカーとしての基礎力を習得させる。</p> <p>見る、聞く、話すことから利用者一人ひとりの状態や思いを的確に捉える観察力や傾聴力、自分の考えや根拠を分かりやすく説明する自己表現力を育てる。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="183 1456 359 1579">第2年次</td> <td data-bbox="359 1456 1396 1579"> <p>ケアワーカーとしての分析力を高める。</p> <p>科目の連携やICTを活用して、利用者から収集した情報から課題を分析し、適切な支援内容や方法を考え、計画する力を育てる。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="183 1579 359 1758">第3年次</td> <td data-bbox="359 1579 1396 1758"> <p>ケアワーカーとしての専門的実践力を高める。</p> <p>的確な観察力で利用者の情報を集め、利用者から得た情報から課題を分析し、介護計画を立案し、習得した高度な介護の技術を活用して実施、評価できる、利用者本位の「介護過程」が展開できる専門的実践力を育てる。</p> </td> </tr> </table> <p>○教育課程上の特例（該当ある場合のみ） なし</p> <p>○平成28年度の教育課程の内容 別紙1 教育課程表参照</p> <p>○具体的な研究事項・活動内容 (1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究</p>	第1年次	<p>ケアワーカーとしての基礎力を習得させる。</p> <p>見る、聞く、話すことから利用者一人ひとりの状態や思いを的確に捉える観察力や傾聴力、自分の考えや根拠を分かりやすく説明する自己表現力を育てる。</p>	第2年次	<p>ケアワーカーとしての分析力を高める。</p> <p>科目の連携やICTを活用して、利用者から収集した情報から課題を分析し、適切な支援内容や方法を考え、計画する力を育てる。</p>	第3年次	<p>ケアワーカーとしての専門的実践力を高める。</p> <p>的確な観察力で利用者の情報を集め、利用者から得た情報から課題を分析し、介護計画を立案し、習得した高度な介護の技術を活用して実施、評価できる、利用者本位の「介護過程」が展開できる専門的実践力を育てる。</p>
第1年次	<p>ケアワーカーとしての基礎力を習得させる。</p> <p>見る、聞く、話すことから利用者一人ひとりの状態や思いを的確に捉える観察力や傾聴力、自分の考えや根拠を分かりやすく説明する自己表現力を育てる。</p>						
第2年次	<p>ケアワーカーとしての分析力を高める。</p> <p>科目の連携やICTを活用して、利用者から収集した情報から課題を分析し、適切な支援内容や方法を考え、計画する力を育てる。</p>						
第3年次	<p>ケアワーカーとしての専門的実践力を高める。</p> <p>的確な観察力で利用者の情報を集め、利用者から得た情報から課題を分析し、介護計画を立案し、習得した高度な介護の技術を活用して実施、評価できる、利用者本位の「介護過程」が展開できる専門的実践力を育てる。</p>						

① 「コミュニケーション技術」・「生活支援技術」・「介護過程」の3科目が連動する授業づくりと「介護実習」の実践

② 評価方法の研究

③ ICTを活用した授業づくり

(2) ピアスーパービジョンにより、自主性・主体性を育てる方法の研究

① たつの市社会福祉協議会との連携による学校デイサービス事業

② たつの市社会福祉協議会との連携による小中学生対象の介護教室

③ 高齢者文化大学生との交流事業（介護教室等）

④ 播磨特別支援学校との交流事業（「共同学習」事業）

⑤ 兵庫県健康福祉部障害支援課や兵庫県西播磨県民局、社会福祉法人円勝会との連携事業であるウェルフェア・コレクション（障害者ファッションショー）

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

① 小テスト実施後の学習ノート作成

② 授業アンケートの実施

③ 実技におけるチェックシートの改善（教材の改善・工夫）

④ アクティブラーニング手法を取り入れた講義や実技の改善

⑤ 演習実技の応用的実践

⑥ 指導法のマニュアル化

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究などについて発表する

① 「楽ワザ」介護（介護技術研修会）

② 介護コンテスト

③ 排泄介助研修会（オムツ交換介助）

5 研究の成果と課題

○実施による効果とその評価

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

「利用者本位」の考え方を獲得し、介護の技術や技能に自信を持った人材を育成するためには、介護の技術に関連した「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護過程」の3科目を連動させ基礎・基本を学び、「介護実習」で応用する力を付けさせる必要があると考えた。重要となる利用者を観察する視点を獲得させるための教材や指導法、評価法を開発し、生徒に基本技法・分析技法・専門技法の3つを習得させていった。

1つ目の基本技法は、見たり聞いたり話したりする中で相手の立場を理解できるように『感性』を豊かにする。そのためには、観察や傾聴、自己の考えを表現する技術を磨き、利用者から必要な情報を収集して的確に記録・整理し、利用者が今をどのような気持ちで暮らしているのかを考えさせることができるように指導していく。これは利用者のこころとからだの痛みを知るきっかけにもなる。

2つ目の分析技法は、基本技法で集めた情報から、その人の思いや考え方の傾向を見つけ出し、利用者にとって何が課題となっているのかを分析し、把握する。利用者の課題を的確に見つけ出すためには、介護全般における基本的な知識・技術の習得が必要になってくる。

3つ目の専門技法は、分析技法で見つけ出した課題に対する介護計画（目標や支援内容、方法）を作成し、実施、評価する。介護実習で基本技法・分析技法の学びを繰り返し行い、ICFの観察法や24時間生活シートを用いて利用者の生活課題が可視化され、生活課題の改善や解決の糸口が見えてくる。

さらに、基本技法、分析技法、専門技法をより効果的なものにするために、兵庫県立教育研修所と連携し、自宅でもパソコンやスマートフォンから介護技術動画が閲覧できるシステムの活用や、

本校の電気情報システム科との連携によるICTを活用した授業研究も実施している。授業では、生徒は介護の動画をタブレットに保存し、自分たちが行っている介護方法や声かけの方法を分析し、他の生徒と情報を共有でき、振り返ることができる。また、自宅でも、動画を活用して予習・復習を自主的に繰り返し行うことができる。

(2) ピアスーパービジョンにより、自主性・主体性を育てる方法の研究

外部の異年齢、障害のある方など多様な方々との交流を通して、言葉遣いや表現方法、表情など、相手に合わせた円滑なコミュニケーション能力を身につけることができる。また、これらの行事を生徒たちが協働・連携して企画・運営することで、生徒の自主性、主体性や自己有用感や自己肯定感を育むことができる。このように「チーム」「協働」「コミュニケーション」に焦点を当て、総合福祉科の数々の行事を、生徒たちの企画・運営により実施している。

①学校デイサービス

文部科学省の「目指せスペシャリスト事業」で指定を受けた12年前から継続して実施している学校デイサービスは、総合福祉科全学年が参加する行事で、3年生が3年間の学びの集大成として企画・運営を全て行っている。各パートリーダーやその他の盛り上げる役割など、生徒それぞれが役割を持つことで、生徒は自ら進んで物事に取り組んでいく。

②介護教室

小中学生・高齢者文化大学との介護教室は、総合福祉科2年生が担当している。ここでは、他人に自分たちの学びや思いをわかりやすく伝える難しさを体感する。全体の総括リーダーが中心となり、介護教室に参加する小中学生の人数は担当する2年生とほぼ同数、高齢者文化大学生に関しては担当の2年生1人が高齢者2、3人を担当して介護を教える。全員が役割を持ち、どうすれば内容がうまく伝わり、参加者に喜んで頂けるかを話し合い、「教える知識と技術をクラス全員で標準化すること」を目標に取り組む。

③特別支援学校との共同学習

特別支援学校との共同学習は、特別支援学校の生徒と卒業後に共に介護現場で働くことを想定して3年生が取り組んでいる。2年次に特別支援学校へ見学実習に行き、生活の様子を知り、障害への理解を図る。3年次には、マナーやベッドメイキング等の実技指導を、生徒が企画・運営し、共に学ぶ。生徒は、相手を理解して共に学ぶ楽しさと物事をわかりやすく伝える難しさを体感している。この活動を通じて、障害のある人に対する教育や支援に興味を持ち、進路を決定した生徒もいる。

④ウエルフェア・コレクション（障害者ファッションショー）

Welfare-Collection（障害者ファッションショー）は、3年生が本校の他学科と連携して実施している。リハビリテーションセンターの利用者と交流し、利用者の思いやニーズを捉え、衣装や小物のアイデアを考えていく。当初は先輩の真似や先生の指示で動くなど、自分たちで作ら上げようという意識や自主性が見られなかった。しかし、利用者や外部の方々と衣装制作の打ち合わせを重ねるうちに、自主的な言動や意見交換の機会が増え、ショーの実施後には生徒主体の反省会を行ない各役割の反省点と改善点を出し合うことで、次のショーの成功に向けて内容を改善していく様子も見られた。

総合福祉科の各行事では、本校の他学科との連携をはじめ、兵庫県、たつの市、社会福祉施設、社会福祉協議会等の官民との連携協力を深化させている。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

法改正に伴って介護福祉士が「痰の吸引と経管栄養等」（以下、医療的ケア）を一定条件で実施できるようになった。本校でも2013年度から医療的ケアの学習をスタートさせている。命に係わるケアのため、より専門的な知識と技術が必要であるが、介護福祉士を目指す高校生への医療的ケ

アを初めて指導することや教員ではない者が指導にあたらなければならないことなどから、指導法のマニュアル作成を行った。

授業においては、前時の復習や生徒の理解度把握のために小テストを行い、間違った項目について自己学習する学習ノートを作成し知識の定着を図った。それにより、前年度と比較しても、全体的に平均点が上昇するなど、知識の定着と意欲の向上が見られた。また、手技の確認だけでなく、身だしなみ、声かけ、安全への配慮等の項目を加えるなど、チェックシートの改良を重ね、生徒同士で評価することで、一連の動作手順を客観的に捉えることができるうえ、コミュニケーション力の向上に繋がった。生徒たちは、演習項目の習得を目指すだけでなく、医療的ケアを行うことで、利用者の思いや家族の気持ちを踏まえた最適な支援のあり方を考え、仲間とともに切磋琢磨し、取り組むことができた。

また、アクティブラーニングの手法を取り入れ、講義と実技の連携化を図った。実技を行うために、座学部分から関連させた内容でアクティブラーニングの手法を取り入れた授業を展開し、生徒の学習意欲や理解等の向上につながった。授業後にはアンケートを実施し、生徒の理解度を把握するとともに授業の組み立てを考え直して、指導法のマニュアル化を図った。

これらの取り組みにより、知識や技術の指導だけにとどまらず、支援の中で個人の尊厳や利用者心理を理解させ、福祉の理念を十分踏まえた授業を行えるようになった。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究

3年間という短期間で生徒により大きな刺激を与え、福祉や介護への興味関心を高めさせ、より意欲的な態度を育てるために、上記(1)～(3)における基礎的、基本的な介護の技術獲得に加え、高度で応用的な介護の技術に触れさせる。

①「楽ワザ」介護技術研修

利用者の思いを尊重し、持っている力をうまく使ってサポートする技術である「楽ワザ」介護の講義や実習は、自分のやりたいことを諦めていた利用者のやりたいことを叶える内容であった。利用者が元気になる取り組みで、生徒の介護の技術習得への意欲が更に高まった。また、「楽ワザ」介護技術を基本にして、格差や相手の状態に合わせた支援方法を工夫することで、利用者・介護者双方により楽な介護ができるオリジナルの技術を生み出し、その方法に「龍北カイゴ」と名付けて練習を繰り返している。これは、利用者の状態や体格差に対応した介護技術であるため、卒業後も介護現場でよりよい介護方法を探求し続ける介護福祉士になることが期待できる。また、小中学生や高齢者への介護教室や文化祭でもこの「龍北カイゴ」を取り入れ技術を伝えることで、生徒は、介護の知識や技術を伝えるためには自分たち自身が十分に理解し、技術を習得しておく必要があることがわかり、練習を重ねることでクラス全員の技術の習得につながった。

②介護コンテスト

兵庫県内の福祉を学ぶ高校生が、介護の技術を競う大会である介護コンテストは、生徒同士が切磋琢磨し、介護の技術とコミュニケーション内容を磨き、高め合うことができる。介護コンテストに参加するために生徒たちは、タブレットを活用して、互いの介護を何度も振り返りながら、支援方法やコミュニケーション技術を確認した。介護者として主体的かつ協働的に質の高い介護を目指し議論し合うことで、仲間同士の絆も深まった。大会当日は生徒は他校の介護技術を客観的に見ることで刺激を受け、その方法を自分たちの介護に応用して、更に介護の技術を向上させたいという意欲も湧いていた。介護コンテストは、本校だけでなく兵庫県で福祉を学ぶ高校生の介護への興味、関心を高めるだけでなく、介護の技術の底上げにもつながっている。

③排泄介助研修会

排泄介助の研修会では、オムツの性能や用途、利用者の状況、状態に合わせたオムツの選定方法や漏れを防ぐための方法などの専門的知識を、花王のメディカルケアサポートグループの方に実技を踏まえて教えて頂いた。オムツ交換における利用者の精神的負担を軽減させるため、より

利用者本位の介護、寄り添う介護を考えた。排泄介助は利用者にとって羞恥心や自尊心に関わる非常にデリケートな介助であり、介護職にとっても負担の大きい介助だからこそ、利用者に安心して気持ちよく生活して頂くためにも、この研修は大変有意義である。

これらの高度な介護技術の習得は、より高いレベルを目指すことになり、生徒の興味・関心を高め、学習への意欲向上につながった。

○実施上の問題点と今後の課題

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

生徒は、介護の技術に関連した「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護過程」の3科と、応用する力を確認する「介護実習」という4つの科目を一体的に学ぶ。その中でも介護実習で学ぶ介護過程の展開が上手く出来るように、模擬演習でアセスメントから介護計画立案まで行う。模擬演習では、利用者設定がしっかりされているかが問題になる。本校では、実習先での担当利用者の基礎データを施設から提供していただいているが、個人情報保護の観点から細部までのデータ提示は難しく、「基本技法」の見る・聞くなどだけで利用者の情報を集めるのは難しい。その結果、利用者本位の介護を計画し、実施、評価なども利用者の表面上の課題に集中し、わかりやすい理学療法や作業療法のリハビリテーションの訓練プログラムや、栄養士や看護師のように指導的な介護計画になってしまう。

介護福祉士として利用者の心情に近づき、利用者本位の介護計画を作るためには、次の3つの課題が挙げられる。1つ目は実習施設の実習指導者との綿密な打ち合わせの必要性である。効果的な教育を行うためには答えが必要です。実習Ⅱの介護過程（介護計画）学びでも、あらかじめ課題と課題に導く過程を、教員と施設指導者で共通理解しておく必要がある。2つ目に担当利用者の協力である。SPH事業を通じて施設との強力な関係ができた。しかし、生徒が介護実習期間中に行う介護が、全て完璧にこなせることはなく、利用者に迷惑をかけたか、配慮が足りないなど多く失敗をする。こうした失敗や成功の経験を積むことで、利用者本位の介護が提供できるようになる。そして、3つ目に利用者・家族への説明と協力要請である。介護実習Ⅱの介護過程（介護計画）では、個人情報の観点からいろいろな制限がある。しかし、計画の立案には、その人のことを十分に知ることが必要である。施設との関係だけでなく、利用者やその家族も介護福祉士養成の一翼を担っていただければ、利用者本位な考え方が理解できるのではないかと考える。

3つの課題について、関連性を意識しながら相互理解を図り、アセスメント実習や計画立案の訓練を重ね、介護福祉士を育てるしっかりとした環境整備が必要である。

また、介護技術の評価、判断力の総合的把握の評価、形成的評価の3つの評価の「見える化」で利用者本位の介護ばかりに目がいきがちである。今後は、説明責任やリスクマネジメントの学びを加え「介護の技術」の自信や「介護のこころ」をさらに成長させ、「人の心を動かす」介護福祉士を育てていきたい。

(2) ピアスーパービジョンにより自主性・主体性を育てる方法の研究

各行事への取組状況で課題であった準備段階における生徒同士のコミュニケーションや協力・協働も活発にみられるようになったが、与えられた役割を実行するだけで、自ら判断し行動することがまだ出来ていない。また、自分のことで精一杯になってしまい、他人に甘える行為もみられた。これは、困った時に助けを求めると考え、解決を第三者（教員）に頼っている現状がある。たくさんの方の行事でより一層、自分たちで作り出す楽しさや面白さを感じて欲しい。そのためには、他人に頼るのではなく自分が主人公である自覚を持たせるとともに、成功する喜び、貢献できた喜び、満足感を持たせる仕掛けが必要である。一人ひとりがリーダーでメンバーになり、感謝や喜びの言葉がけによって達成感や社会的有用感を感じるように指導していきたい。また、そのためにも早い段階

階から計画的に取り組めるように環境を整え、各機関との協力・連携を図っていききたい。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

医療的ケアを実施するにあたって、まず指導者確保の問題が挙げられる。この分野には厳しい講師要件が課せられているため、指定された要件に沿った人材を確保することは非常に困難である。たとえ講師を確保しても講師採用に人件費が必要となるため、経費面での問題が生じる。また、人材養成をすることも重要であり、県だけでなく全国で準備し、養成していくことが急務である。

次に、本研究で作成し始めた指導マニュアルは、医療的ケア全領域の作成を目指していききたいと考えていたが、多大な時間と労力を要するため、研究終了までに完成させることは難しい。今後、更なる改良も加えながら完成までに数年要するかもしれないと懸念される。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究

高度な介護技術の習得が、生徒の福祉・介護に対する興味・関心を強くした。特に、利用者の持てる力を最大限活用する「楽ワザ介護」では技術を習得しようとする意欲的に取り組んだ。年間5回の介護技術研修で利用者本位の介護を考えながら、利用者の体調や状態を生徒が判断しながら提供する介護をアレンジする「龍北カイゴ」は簡単に習得できるものではない。つまり、学校の運動部の活動と同じように、何度も何度も繰り返し練習を重ねることが必要である。また、そこには介護の根拠を理解し、自分のものにしなければならない。

加えて、研修だけでなく生活支援技術の授業の中でも継続して指導していく必要がある。よって教員も研鑽を積み重ね、新しい介護技術が習得できるよう常に励まなければならない。今年度で、SPH事業は終了する。そうなれば介護技術研修会も終了することになるが、まだまだ「龍北カイゴ」を指導できる教員は少ない。今後、どの様に継続し行くかが大きな課題である。

また、学校独自で「龍北カイゴ」の習得を目指すには金銭的にも不安がある。生徒の学びたいという好奇心を刺激する介護技術研修会の継続のためには、県のバックアップを期待したい。なお、福祉科の教員が技術指導できるようになるまで、介護技術研修会を続けていきたいと考えている。

介護コンテストでは、SPH事業で目指した利用者本位の介護を大切に、コミュニケーションを重視して大会に臨んだ。実施してみると、利用者役の施設指導者とのコミュニケーションに時間をかけてしまい、それに加え自立支援や安全な支援を提供すると制限時間に間に合わなくなってしまった。しかし、介護技術コンテスト全国大会に見られるようなセリフを並び立てるコミュニケーションではなく、安心と信頼関係を築く温かく自然な声かけすることで利用者本位の介護が成立すると思う。また、学校で勉強したことが即現場で通用するようにコミュニケーションをさらに重視し、高度な介護技術として教えていく必要があると考える。今後、教員の意識改革も含め、福祉教育の延長線に介護の現場がくるような福祉教育を充実させていきたい。

高度な介護技術を継続して学ぶことで、福祉や介護への興味関心を更に高め、感受性の豊かな高校生の時期にしっかりと「利用者本位の介護」を考える機会を与え、今の福祉の現状をより良くする方法を考え続ける、探究心の強い介護福祉士を育てていきたい。

別紙 1

平成28年度実施教育課程（総合福祉科）

県立高等学校入学生徒教育課程表											
全日制の課程			本校								
総合福祉科			平成28年度実施					兵庫県立龍野北高等学校			
教科・科目・単位数			類型	1学級					単位数	計	備考
				介護福祉類型 (医療福祉類型と合わせて1学級)							
教科	科目	標準単位数	1年		2年		3年				
			必修	30	必修	28	選択	2			必修
国語	国語総合	4	2	2					4	7・9	3年看護科・総合福祉科のみ
	現代文B	4					3		3		
	古典A	2						2	0・2		
地理歴史	世界史A	2					2		2	4	
	日本史A	2		2					2		
公民	現代社会	2					2		2	2	
数学	数学I	3	3						3	3	電気情報システム・環境建設工学科のみ
	数学III	5						2	0		
理科	科学と人間生活	2		2					2	4・6	
	生物基礎	2	2						2		
	化学基礎	2						2	0・2		
保健体育	体育	7～8	3	2			2		7	7	「こころとからだの理解」で「保健」2単位代替申請済み
	保健	2							0		
芸術	音楽I	2				2			0・2	2	
	美術I	2				2			0・2		
外国語	コミュニケーション英語I	3	3						3	3・5	学校設定科目
	実用英語講座	2						2	0・2		
家庭	家庭基礎	2		2					2	2・4	学校設定科目
	日本の伝統文化	2						2	0・2		
情報	情報の科学	2							0	0	「福祉情報活用」で代替申請済み
工業	電子技術	2～6						2	0	0・2	電気システム類型のみ 建築類型以外 学校設定科目、総合デザイン科以外
	建築構造	2～6						2	0・2		
	ソフトウェア技術	2～6						2	0・2		
	色彩入門	2						2	0・2		
商業	ビジネス情報	2～8						2	0・2	0・2	
家庭	フードデザイン	2～6						2	0・2	0・2	
福祉	社会福祉基礎	2～6	2				3		5	54	学校設定科目、総合福祉科以外選択
	介護福祉基礎	2～6	3	2					5		
	コミュニケーション技術	2～4		2					2		
	生活支援技術	2～12	3	4			4		11		
	介護過程	2～6		2			2		4		
	介護総合演習	2～6	1	1			1		3		
	介護実習	2～14	4	4			5		13		
	こころとからだの理解	2～10	4	3			2		9		
	福祉情報活用	2～4					2		2		
社会福祉援助技術基礎	2						2	0			
看護	看護入門II	2～4						2	0・2	0・2	学校設定科目、看護科以外
総合的な学習の時間			3～6						0	0	「介護総合演習」で代替届出済み
各学科に共通する各教科・科目の単位数計			13	10	2	9	0・2	34・36	0・2	主として専門学科において開設される教科・科目の履修単位数	
主として専門学科において開設される各教科・科目の単位数計			17	18	0	19	2・0	56・54	2・0	福祉科54単位	
科目単位数計			30	30		30		90			
ホームルーム活動週当たり時数			1	1		1		3			
週当たり授業時数			31	31		31		93			
始業時刻・終業時刻 始業時刻：8時25分 終業時刻：15時15分(ただし、週1日のみ16時20分)											